竹島

祈りのかたち

医者のいない昔は、疫病で島民の多くが死亡したという。頼る術は、まじないや薬草、祈祷のみ。そのためか、三島村には先人の疫病退散の願いが様々なかたちで残されており、思いを今に伝える。

竹島では疱瘡(ほうそう)よけの石碑Ⓒや馬方踊り、祠に石を捧げる風習に病除け祈願のかたちが見られる。祠の風習は絶えたが、祠Ⓐと中の石Ⓑは今も確認できる。石は海で拾って神に捧げる。

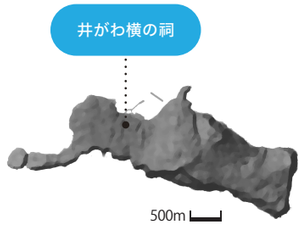
馬方踊りは疱瘡除けを願って始まった。竹島に残る記録では、江戸中期の一七二八（享保十三）年に疱瘡が流行し、島民の1／4となる三十六名が死亡。一七九〇～一七九三（寛政二～五）年の流行では三十九名が死亡した。生き延びた女性達は、寛政六年に馬方踊りⒹをはじめた。

疱瘡は天然痘の古い名で、予防策は十八世紀末のワクチン発明までなかった。強い感染力で紀元前から多くの人が亡くなっている。三島各島では、疫病がはやると病人を家に置いて、残りは山に逃げた。また、来島者は集落へ入る前に一旦隔離した。竹島ではオンボ崎に一週間隔離したという。

十九世紀以降に疱瘡は治まり、赤痢・コレラ・腸チフスが流行した。竹島では赤痢にはお灸をし、腸チフスには薬草やミミズを煎じて飲んでいる。この療法は全島同様で、昭和二十四年、硫黄島に診療所ができるまで続いたというⒺ。（三月を参照）

思い出話

「昔の疫病の話を一歩踏み込んで想像できるのは、コロナの経験によると思うことがあります。」

竹島地区 三〇代 男性

2